

(1)

藤田恵美氏へのインタビューの主な内容



筆者：先生は日本に帰ってきて中国の大学と連絡を取っていらっしゃらないんですか？

藤田：とってないです。

筆者：中国の大学側からも？

藤田：はい。しかし、私は何度か訪問はしました。前の学長の孫。

顧：孫維炎、同級生ですから。

藤田：行ってお会いしたことはあります。それから対外貿易学院、経済貿易大学 40 周年記念に一度行きました。そのあとの 50 周年は行ってないです。

顧：40 周年記念祭りは、1994 年でしたかね。

筆者：50 周年記念を記念するため、本が 1 冊出版されたのですが、その本をコピーして持ってきました。今の北京貿易大学の 50 周年史を持ってきました。50 周年迎える前に 2004 年に出版されたもので、陳濤とか当時の作った人の名前とか、李秋野とか。馬乃庶ね、馬も亡くなったでしょ？

藤田：名前は懐かしいな。李寿慈は英語の先生だったけど。老眼鏡かけないと見えません。

顧：筑波大学にお見えになるときは汪先生も一緒だった。その後、当時は張大夫（大夫は医者のこと、筆者注）と結婚なさっているんですね。

藤田：張大夫は亡くなった。日本で亡くなった。

顧：川口の日本語学校で汪先生は少し教鞭をおとりになっているんですね。その後北京に帰られて、1 人でご高齢なので誰もお世話してくれないので。お孫さんも奥さんも。

藤田：あの人たちとは交流ない。それはどっちの奥さんの？

顧：それは最初の奥さんの。

藤田：私がよく知っているのは 2 番目の奥さん、そして 3 番目の奥さんとはここで日本でお目にかかった。あの人は埼玉医科大学を卒業してお医者さんでした。汪先生には、年も年だし、年金ももらえないし、日本の人にも迷惑かけるし、病気になったり、日本語を教えたと言っても給料も自分の生活もできないくらいしかもらっていなかったから帰りなさいと言いました。中国では老教授だから面倒みてくれでしょうって帰りなさいって。当時大使館にいた石さん、彼も王先生帰ったほうが良いと言っていた。交通費も出せないから。お孫さんも来ていた。気功とか治療のことをやっていたらしいです。それ以降は知らない。日本語をやっていたから日本にいたいという気持ちはわかるけど。金鋒も亡くなったでしょ、文化大革命で、この方は本当に犠牲になった。あのころはいらっしゃらなかったでしょ？

顧：金鋒先生はもともと日本の市長の通訳をやった人だったでしょ。

藤田：お前はスパイだといわれて文化大革命で植物人間になってしまった。

筆者：この方は日本に留学したことありますか？

藤田：ありません。

筆者：ということは、旧満州で日本語覚えた。小学校から日本人学校じゃなくて満州人学校に行かれていたんですか？

藤田：わたしはよくわかりません。しかし彼は朝鮮族の方なんですよ。だから、朝鮮の方の民族性はとても率直で、学生に対しても「だめだ！それは間違っている！」という感じで。だから文化大革命のときは学生さんたちにつるし上げられて、そして私がお会いした時はすでに植物人間になっていました。そのとき私もいろいろ「下放労働」にも行きました。これは日本人には誰にも言ってないです。

筆者：先生は外国人なのに？

藤田：私がいきたいといって、おてんばおばあちゃんって言ったでしょ。そのおてんばなの。何にでも興味を持ってみんなが大学に先生も学生も出て行っちゃったら私一人ぼっち残って。初めはどこへいったかというところ黒竜江省、次は吉林省舒蘭県、そこで対外貿易部の幹部と一緒に「五七」幹校を作った。そして、帰ってきて今度は河南省息県という豊かなところ河南の真ん中であってとても交通の便が悪くて、今度は息県に「幹校」を作った。

筆者：1969年のことですね。

藤田：ここで、息県で病気になって、風土病で、田植えをして足から菌が張って余命3か月と言われた。これは西薬では治らないから北京中医学院で治療しなさいと言われて、体力回復をしなさいと言われて。この病気になって帰る前の年くらいだから1972年くらいに日本に帰る決心をした。(46歳1974年に帰国。筆者注)

それで、どうしても帰りたいたいということで父母に連絡して父母に帰ってきなさいと言われてこの人と長女と二人連れて帰ってきた。1949年にご両親は帰還された。お父さんは技術者でアメリカに留学していて、フォードで製造技術を学んで、あそこパイロットだった。兄弟は4人で、横浜で生まれてからすぐに母方の秋田から来たおばあさんが私を盗んで帰ったので、7歳まで秋田で育った。名前もアグミヤってお婆あさんの名前だったんです。生まれた時から違う子と違った。4人兄弟の長女で一番上。おばあさんは旦那さんを早く亡くして娘たちが嫁に行きさみしかったので私を連れて帰ってすごくかわいがって、私がこんなにだめな人間になっちゃいました。

筆者：先生はお嬢さん2人と息子さん1人ですか？

藤田：はい。息子が1番上です。

去年3月に日本に帰ってきてリハビリを始めて、また去年の10月に日本で自転車で事故にあって、76歳のおじいちゃんが運転する自転車とぶつかって飛ばされました。

筆者：ご両親が日本に帰るとき先生は中国に残られましたよね、なにか夢とか希望とかあったのでしょうか。

藤田：夢とか希望とかない。これについては今は語りたくない。敗戦国の国民としてこれは非常に…戦争とはどんなに相手の人の命を奪い財産を奪った反面、自国の国民にも大きな災いをもたらしたこんな戦争が世の中にあつていいのかとずっとそのような気持ちがあります。日本政府は敗戦によって国民に対しての責任を負ってない。海外にいる邦人に対して何をやってくれたか、どんなことをしてくれたか。……憤りを感じます。本当に。

筆者：東北の日共前後委員会に勤めたことありますか？そこの関係はありますか？

藤田：ありません。

筆者：東北から北京に行くきっかけは？1947年はとても北京に行くのは危ないですよ？

藤田：北京にいかざるをえなかった。そのことはお話しません。

でも私の性格がなんでもチャレンジしよう、珍しいものは何でも好き、知らないことは何でも知りたいので、どんな場合でも状況でも、何でも何か知りたい得たいという気持ちが強いんですよね。

筆者：満州の国立女子師道大学についてわかりますか？先生は1期生ですか？

藤田：違います。その前からあります。満州建国大学女子部ではなく満州建国大学と姉妹校になっています。満州国立師道大学（男子師道大学）、吉林で、こちらは新京にある。資料持ってきます。

藤田：これは去年か一昨年在北京に行ったときに北京にいるときの女子大の人たちが集まって私たちが一番最後です。

藤田：これは私の同級生で今北京にいます。この人がアレンジしてくれました。

これは日本、そしてこれをもたらしました。東北師範大学？

筆者：いまは師道女子大のことはほとんどわかりません。この会報はいつの会報ですか？

藤田：私もあまり気にしてないです。金鋒さんは男子師道大学を出たと思います。これは張素我。今年ももらったんだけど、彼女と私と行き来しているんです。これは張素我先生の家です。これは張素我先生の本です。

顧：張治中の娘。

筆者：名簿とこれを貸してください。

藤田：私が作ったビジネスの教材は持ってこられなかった。持ってこれる状況じゃなかった。中国政府はその時、私にたった100ドル、帰国する時にくれなかった。

筆者：当時の給料は月40元を超えましたか、生活費は足りませんか。

藤田：私の時代の給料は40元より多かった。生活費は足りるけど、「糧票」とか「布票」とかがあったからね。あちこち穴だらけだった。タースグアンの何代もみんな私の教え子です。〇〇とか、〇〇とか。

顧：みんな私の後輩ですから。〇〇は私の同級生です。

藤田：これは娘の写真です。コロンビア大学の。ここが私の職場です。いつも教材書くときは大変です。新しい資料を常に使うので。ビジネス実践セミナー。これはプログラム。ロールプレーとか新しいものを全部足すのです。

筆者：昔日本語をこのように教えていたのですか？

藤田：わたしは懲り屋なので日本語を教えるのに自分で教える対象などを分析して、独自の教える方をとります。私の方法で、突拍子もない日本では誰もやっていないことをします。

筆者：昔の教え子との写真はありますか？

藤田：今の写真は多いですが、昔のは1枚だけあります。〇〇さん〇〇さんみんな私の教え子です。これは富士フィルムです。年1回のクラス会、技術者だちです。

筆者：先生の昔の写真はありますか？

藤田：私は持ってないです。娘たちは持っているかも知れないです。中国から帰るときに、これからどうなるかわからない、人脈もない人生なので全部捨てて前向きで子供たちもいるので、自分女性一人で自分の国だけけど未知の世界なので捨てちゃったの、しかも来るときは写真など持ってこれないし、全部税関で取り上げられるし、骨董品を持っていたけど取られちゃった。

筆者：私もさっき先生が言った気持ち経験しました。やはり日本で暮すのだから、中国から持ってきた今までのものを、今までは大切にしていたけど新たな気持ちで前向きな気持

ちで全部捨てました。

藤田：子供たちも育てなきゃいけないし、自分も生きていかなきゃいけないから、日本は私たちを裏切った。そういう話をすると腹が立つけども。

筆者：満州での一番楽しい思い出はなんですか？

藤田：あのころは、政治とか何もわからないから非常に大らかでした。父親が技術者だったので学校を転々としたので友達の思い出はあまりないし、日本人学校だったので中国人はあまりいなかった。その中で私はおてんばだったので、いろいろなスポーツをしたのが思い出です。

筆者：北京で教えていた時の一番の思い出はなんですか？

藤田：若い青年と一緒に勉強するのが楽しかった。私も若かったけど…

あのころは、第一期生（本科ではなく専科3年）は対外貿易部で…名簿ありますよ。

顧：私は本科の2期生です。57年入学ですから。この名簿は不完全ですね。私のクラスの全員ではないですよ。

藤田：第一期生は幹部だから基礎ができていて、でも二期生は全部〇〇中学から来たから中国語もちゃんとわからない、子供の時に革命の仕事をしてきた人たちが来ていた。その人たちが二期くらい続いた。その人たちに教えることに戸惑いました。自分が日本語を知っているからって教えられるものじゃない。まず教えるのにあたって、①彼らは大人である。②彼らは漢字がわかる。③文法はおしえなければいけないけど、中国語の文法もわからないので変則的に教える。④日本語の環境が全くない。日本のものを見たりなど環境が全くない。この4つのいいところと悪いところを踏まえてどのように日本語を教えるかというところから私の日本語を教えることが始まりました。書いたり聞いたり話したりいろいろあるけど、聞くのと話すのは（耳と目）環境があればできる、なくてもつくってあげればいから。問題は書くの。大人だからそういうところから入って行っても受け入れない。頭があるから考える。そこで私が考えたのは、一年生の時は考えさせるために、教材に文法の法則を探させるように仕組む。図書館に日本語の本も何もなかったから、当時は親と通信できたので親に小学校と中学校の本を送ってもらいました。

筆者：当時のクラスは何人くらいでしたか。

藤田：10人くらい、後の方になると15人くらいになりましたが、20人に達することはなかった。理想的でした。私の教室は日本語の発音に注意しました。出身地によって発音ができない音があったので地域別に一列にして、カードを作ってこの子はここがダメとかをカードに書いて指摘しました。学校側も私を信用してくれて私のやりたいようにさせてくれた。最初のころは政治的なことで信頼されてなかったけど、だんだん一緒に日本語を教えた先生も私は戦争当時幼かったし、何の関係もないのだと信頼してくれるようになった。また、将来は外交より貿易が先に行かなければならないという、外国の人とコミュニケーションをとらなければいけないという使命感がみなさんありました。やはり中には、私のお父さんが殺されたとか、日本語をなんで習わなきゃいけないんだとかいう抵抗もありましたが政治指導員などが、外交より先に貿易で外交をしなければいけないんだ。ということを説得して、初めて日本語を勉強しようという気持ちになったという葛藤がありました。

筆者：顧先生の時もそういう葛藤はありましたか？四期生だからそういう思想はありまし

たか？日本語を勉強したくないとか。

藤田：ありましたよ。喜んで勉強しているんじゃないくて。命令としてしなければならなかったの。

顧：私のクラスで日本語を第一志望にする学生は私だけでした。「工農兵」からきた人は外国語にあまり触れたことがないので、英語やロシア語より、日本語の方が勉強しやすいかもしれないという感じで。

藤田：泣いていた子もいましたし、憎しみからスタートした子もいたと思います。しかし、憎しみを持って接した人は私には1人もいません。私は本当に授業に出てうれしいと思っていましたし、この人たちのために命をささげれると思いました。教材もそれで変えて行ったりしました。対外貿易学院は大学入試は成績から選ぶじゃなくて出身とかから選ばれます。「海外関係」があつたら入れないです。何期生までは百パーセント党员です。

筆者：顧先生はなぜ入ったのですか。

顧：本当は第一志望じゃなかったし、むしろ経済とかより語学に興味があつた、しかし私は大学に入る前青年団の団長もしてたし、政治的には大丈夫でした。私は貿易に興味がないです。むしろ日本語に興味があります。そして対外貿易学院は先に学生をとるんです。

筆者：先生が北京にいらっしゃったとき病気になったらどうしてたんですか？

藤田：当時はただだったので。よかったです。公費医療、外国人も一緒です。住宅も「公房」、水道代も電気代も、自己負担の分は少ないです。

筆者：先生は学校からもらったお住まいは何部屋ありましたか。

藤田：そんなにないです。1～2部屋くらいです。トイレとかも共同のやつですし、キャンパスに近いところにありました。貿易学院は？？？にありました。宿舎は古い大きな四合院みたいでした。貿易大学は学校らしくない学校でした。

筆者：授業のとき初めから日本語を話したら誰も聞き取れないですよ？どうされていたんですか？

藤田：最初はちょっとずつ教科書に書いてあるわかりやすいところから入って、中国語で言わせて工夫をしながら、だんだん動詞の変化とかは強制的に教えて、五段活用とかも強制的に教えます。手をたたきながらリズムをとって教えたり。朝は教壇に立ったら必ず5分間テストします。口頭のテスト。

筆者：女性はいましたか？

藤田：1、2期生は1人もいません。3、4期生に各1人くらいいたかな。その時の女性は、後に偉くなっています。

筆者：北京で日本語を教えていた先生たちと交流はありましたか。陳信徳先生の夫人も日本人だったんですけど。

顧：黄啓助の夫人も日本人です。

藤田：ありません。そういう奥さんたちと全然ありません。

筆者：休日などはどのようにすごしましたか？

藤田：私はバレエとか劇とか映画とかは何でも見ていました。

山本：そういう映画とかはお子さんをつれていきましたか？

藤田：いいえ。当時そういうチケットは自分で買うのじゃなかったから。簡単に買えるものじゃなかったから。「内部票」ですよ。

当時私たちはもちろん北京から出たはいけないというルールがありました。いつまでかはわからないけどずっと続きました。英語の先生たちと仲が良くて、すごくよく援助してもらった。〇〇に連れてってと行って連れてってもらった。私は強制的に行かされたんじゃないんで連れてってと頼んだ。そして私が言ったら私の知らない前期生がたくさん来てくれてよく来てくれたといわれた。

筆者：その時は日本に帰りたくなかったですね？

藤田：はい、風土病になって余命宣告されてからです。死んでたまるかと思って。その頃は楽しかったから、農民は付きっ切りで私に農作業を教えてくれたし。しかし、危ないから外国人は帰りなさいと言われた。

藤田：舒蘭県には2つの農村があって、一つは漢民族、もう一つは朝鮮民族。朝鮮族は水稻やるんですよ。そこに貿易学院の幹部学校を作ったんです。そこは解放軍の農地で、そこはものすごく寒いので寒くなると私を「炊事班」に入れてくれるんです。みんな気を使ってくれて。わたしは文化大革命はそれほど辛くなかった。学生に守られていた。学生感謝している。周りの人はいろいろやられて大変だったから。金鋒は植物人間でしょう。おくさんは本当にいい人で。漢民族でね。

筆者：普通なら日本人がやりやすいですよ。だから先生みたいな日本人がいるのにやらないのが不思議。

藤田：最初は外国人は参加するなって言われたけど途中から毛沢東が参加しろって言って、でもみんなもうグループがあるから行くところはなくて、アラビア語の先生のグループに入れてもらって。そうすると、いろいろと情報が入ってきます。外国人の先生は「牛棚」に入られます。

1回だけ「大字報」に貼られたの。スパイ容疑で。何年に父親が来た。何かの情報を伝えに来た。という風に、でもその時は解放軍が入ってきてたから、助かりました。

顧：学生に？

藤田：そう。

文化大革命のころの学生と今は一番交流がある。学生にひどい目に合っていないからどなたとでも仲良くなれる、学生たちが私を守ってくれた。天津にも大連にもたくさん学生がまっているんですよ。

筆者：帰国のことをもっと詳しく聞かせてください。

藤田：文化大革命を通して中国はとても変化した。私がかつて知っていた中国ではなかった。それで中国という国がわからなくなった。そして、ちょうどそのとき病気になった。しかし、対外貿易学院に頼んでもどうにもならないことも中国のシステムも知っていた。だから中国人の格好をして知り合いの名前をだして兵隊が立っていて一般人は入れてもらえない貿易部に入れてもらった。そこで自分の病気のこと貿易学院から来たこと言って事情を説明したら貿易部の方から学院の方に連絡がはいって。日本大使館に行く時もパトカーがついてくるし大変だった。だから、大使館の人に言ったら日にちを指定され大使館の職員が待っていてくれてどうにか手続きができて上のお姉ちゃんとかの子を連れて帰ってきた。帰るときは骨董品を持っていたが押さえられて、天津から船の出発の前に教え子が飛んでき



てくれたりもした。

筆者：未知な祖国での大変さの中で人の目を気にしましたか？

藤田：人の目は気にならなかったけど仕事がなかなか見つからなくて。仕事はまず、日中友好協会にいった、日本に帰った時は 100 ドルしかなくてそれで九州から東京まで帰れたかどうかわからなかった。それで私の両親がこの子たち 2 人を迎えに来てくれて。

ご息女：うちのおじいちゃんは旅行好きで九州に上陸したいばかりで、どうせ来たんだから旅行して帰ろうって、その後京都で遊んで東京に来ました。当時 20 歳でした。

藤田：船籍はソマリアかどっかのもので、クルーたちは全員香港の人。うちに帰ったら、クルーたち全員が東京の板橋にある私の家に着いていて、友達になっちゃった。そのくらい仲良くなった。

筆者：日中学院で教えてたですか、それでも日中友好協会にいたんですか。

藤田：最初は日中友好協会に友達がいたからそこに行った。でもあまりお金にならなかったから夜間の日中学院の方に行った。そのうちに話があって、愛知大学。日本で有名な考古学者から、日本の大学は学閥なので私はどこにも属してないから、しかも私は中国から来たから中国語が話せる。しかし、教授たちは中国語を話せないし、書けない。だから私がいたら邪魔なんです。当時 1970 年代。紹介をしたいのはやまやまだけど、きっとここで苦勞する。そして、愛知大学は名古屋だから私はどうやって行くんですか。

藤田：私も生活がかかっているから、正式になれるかわかんないし。生活がやっているとかわかんない。そういう時にちょうどコクボウソクにいました。そうしたら日商岩井から話がありました。そうして、岡崎嘉平太先生とお話した。生活自体は大丈夫だといわれてこれからは日中貿易の時代だから女性だけ頑張ってくださいと言われて。

藤田：日中友好協会の熱海で展示会をしたときに警察に尾行されて、写真まで撮られて、当時の団長さんたちが記者会見をしてくれて、そういう行為をやめてくださいと言われて。その時貿易交渉も止まって再開まで 2~3 年かかりました。日商岩井に入った後もいろいろありましたよ。

初期の契約交渉は 90 %成功しました。こういう経緯があるといふとこっちの人だと思っ

て交渉してくれるから。最後に富士フィルムとしました。8 年かかりました。

時代が私を導いてくれた。私はやることを一生懸命にやったに過ぎない。これは速水さん、日銀の総裁で最近亡くなった人。この人は日商岩井で社長だった。私は 3 代社長に仕えたけど速水さんが 1 番長い付き合いだった。一番尊敬している。ゼロ金利をした人で、当時はずいぶん批判された。メディアから批判されて円高は悪くないから、円高を利用して輸入をなささいといつたんですけど当時は批判されました。

筆者：1954 年の時の先生はもう先生しかいないですよね？

藤田：はい。昔の音は全部忘れて前向きに生きていこうと思ったから昔のことは忘れました。子供たちにもそうやって言い聞かせました。

文化大革命が終わって私の本を寄贈しに図書館にいったら、大学の資料はほとんど焼かれてなかった。

苦勞したら記憶がなくなることもありますよね。かなり記憶が薄れてます。人の名前、特に年代なんて覚えてないですよ。

筆者：先生は中国で20年～30年に暮らした日本人でよかったですか？

藤田：すごく思います。こんな貴重な年代に生まれて中国にいて、素晴らしい生徒や人との出会いもありましたし。

筆者：複雑な国、中国についての思いは、そこで体験したことについてどう思いますか？

藤田：毛沢東が統一して、希望を持たせた。そして失望も持たせた。つまり、政策が間違っていたんですね。まさに権力闘争でしたし。

筆者：日本についてはどう思いますか？

藤田：現在このように、本当に経済で1位だとかとんでもない。政治はもっと悪い。それは終戦、負けたということを真摯に反省して真摯に分析してきっちり反省の上に立たないと正しい現在を見つめることができない。それができないと将来の方向性が見えてこない。しかも反省していない。というより、彼らは反省することが怖いんですよ。自分を否定しなければいけないから。自分を否定しないで日本の反省はないのです。だから目をつむっているんです。現在の日本の脱落はそこにあります。

筆者：日中友好は本当にできると思いますか？もちろん今も友好ですけど…

藤田：それは問題ありですよ。日本のそういう原点に立ち止ってないという中国人の怒り。

筆者：あと、中国の歴史勉強は、戦後より戦前ですよ。そこは問題だね。

藤田：中国にも言いたいことがいっぱいある。理論はしっかりしてるけど、やっていることと言っていることが違う。たとえば国際紛争。話し合いで決めるのが1番いい。しかし、中国は自分の都合でたまに武力でおさえようとする。たとえば台湾にたいして。そういう使い分けが未熟です。学問の世界においても同じです。客観的な見方ができない。今の北朝鮮を見ていても昔の中国と同じ。毛沢東が言っていたのはお互い取りたいものがあるときは戦争でまず先制する。大砲で勝ち取ったことこそが本物だと。そういうことがあるんです。そういう意味で北朝鮮は優等生。北朝鮮がやってることは毛沢東と一緒に暴れん坊でやんちゃで駄々っ子で。しかしそうやって方法考えてるという点では中国の人は頭がいい。

上海では腰をやられたの。だから天気が悪いと腰がいたい。

筆者：毎年10～15名くらいの学生っておっしゃったんですけど、ずっとそんな感じでしたか。

藤田：はい。トータルしたら300人くらいですかね。先生もそんなにいなかったけど。でも専門はすごくて、アメリカで貿易ビジネスをやってた人など、とにかくものすごく有名で。だからこういう先生はめちゃくちゃにやられるけど最後に名前が残るのはこういう先生。

世界的に有名な経済学者。毛沢東の誤りっていうのはそういう人材を使わなかったこと。大学では1年だけ自由を与えたけどそれから前も後も先生たちの自由なんかなかった。書いちゃいけない、言っちゃいけないって。その羽目をなくしてこそ自由。しかしそれをなくしたら今の政権は持たない。

筆者：その時は会話を中心にしてましたか？

藤田：はい。会話中心です。

筆者：どの言語を選んだ学生が多かったですか？

藤田：やはり英語でした。英語は 20 人くらいでした。1 番多いところで、でもそれはよく考えていてやはり外国語を習得しなければいけないから少人数でした。

筆者：4 期生で日本語を選んだのは 1 人っていうことはその前も少なかったですよ。

顧：はい。

藤田：だって私のクラスにもお父さんが殺されたのに日本語なんか習いたくないと泣いた子がいました。そのくらい少なかったです。

顧：私のおじいさんの弟は山西省のある県の工場会の会長やっていたんですけど、日本の軍隊が入ってきて明日までにニンジン何個用意してとか言ったので、漢方薬の人参をもって行って日本の兵隊に殴られました。まあ当然ですよ。その人参なんですから。ちょっと困ったことがあれば助けてくれた人は日本人でした。こういうことがあって、日本語はどんな文字だろうとか人参と人參は何が違うだろうと思って。本当は北京大学とかに行きたかったんですけどここで日本語が学べるならと思ったのがきっかけでした。

藤田：チャレンジ精神大切だから。

藤田：先生たちは慶応大学とかなのですごく上手ですよ。陳濤は慶応大で、あまり人と交流しないですね。張厚聡は慶応大、夫人はロシア人、子どもがいない。汪大捷は学問がすごくいいがとても古い、文法中心。宋文軍は京都大。留日はみな個性が強い。

筆者：宋先生が赴任したのは、いつですか。

顧：かなり遅いです。私が卒業した年はまだきていない。1963 年、64 年までいないと思います。

藤田：最初の先生は、陳濤、金鋒、汪大捷です。張厚聡と宋文軍は後からきたんです。全部 5 人。

金鋒は朝鮮民族だからなまりはあるけど学問としては素晴らしかった。みなさんそれぞれ特徴はあるけど素晴らしい。日本の奥深いことわざなども知っていました。毛沢東が言ってましたけど先生たちがいいから学生たちがいいんですよ。学生は超えられないんですよ。毛沢東いい面も悪い面もあるけど、政治としては内部の方で手荒いことしていたみたいですけど、いろいろな政治闘争とかをまとめた本などは正しいところはたくさんありますよ。ただ最後の文化大革命はやってはいけなかった。たくさんの方が亡くなったし。人の信頼関係が崩れた。儒教も崩れたし。これは天皇万歳と一緒にだと思った。私が見た中国とは違うと思ってもうここには入れないと思った。毛沢東の晩年は恐怖が多かったと思いますよ。スターリン批判などもそうですし。あと彼はインテリは嫌いなんですよ。それは先生たちがいじめられているのを見ればよくわかりますよ。やっぱり中国は複雑ですよ。歴史というのは続いているんです。資本主義についてかれは全く違う。中国以外の世界を知らないし。ソ連も毛沢東を見くびっていたし、それで彼は怒ったと思いますよ。その時生きていた人とは感じ方が違うかもしれないけどどっちがいいとかは言えないですよ。まあ中国は大変な国ですよ、日本に比べて政策はいいですよ。若い人がはいつているのもそうだし。日本の官僚はグローバルと言いながら固定されているし、だんだんだめになる、国民はいいんですけど民族の良さをどのように取り戻すかが大切なんです。それが今できない政府になっていますよね。これからどうでしょうね民主党になったことですし。